

心に生きる藤原長作先生

方正県日本語学校 校長 柳 長青

■藤原長作先生との出会い

1981年4月、藤原長作先生が方正に来られて水稻寒地早育稀植（水稻寒地の保温折衷苗代と粗植法）技術試験をされたとき、私は徳喜郷政府で仕事をしており、郷共産党委員会の書記をしていた。徳喜郷は県都市部と近いこともあって、県政府は藤原長作先生の試験田を徳喜郷富余村西部の27ムー（180畝）の稲田としたことから、私は藤原先生とお会いし、二年間の仕事をご一緒する機会にめぐまれた。

当時の藤原長作先生は、既に70歳となり上背はなく白髪まじりであったが、精神はかくしゃくとされ、その立ち居振る舞いや素振りには、水稻寒地早育稀植技術実現への確かな成算があるように見受けられた。方正地区の気候や緯度は、彼の故郷の岩手県との差異が少なかったので、十分に自信を持たれていたのだった。

藤原先生は富余村の農民の家に住み込み、生活の面倒と仕事を助けるために県・郷政府は通訳と賄い人、助手を派遣し、試験が順調に進むことを担保した。

県政府は藤原先生の試験をととても重視し、私たち郷政府も特別な関心を寄せていた。私はよく郷村幹部を連れて富余村試験田に彼を訪ね、藤原先生もまたよく郷政府を訪ねては試験の進捗と水稻の成育状況を報告してくれた。

■画期的な成果に驚く

方正県とその周辺地域は、それまで水稻の収量はずっと1ムー当たり400斤（200kg）ほどであった。低収量に属し、長年にわたってこれといった進歩はなかった。藤原先生の試験田のやり方は、保温折衷苗代と粗植（每穴1、2株）に水を浅くはったものだった。農民たちはこの方法が高収量につながるとは当初は信じられなかった。

三ヶ月が経ち、対照田との対比検証となった。藤原先生の試験田は、水稻の生育が良く、株張りは多く、穂も長く、穀粒は溢れんばかりに満ちていた。収量を量ると、1ムー当たり1000斤（500kg）に達していた。藤原先生は冗談でこう言われた——「まだスズメに食べさせるにも足りないよ」と。

県・郷政府は検証会を開き、省政府も方正県で検証会を開いた。藤原先生が方正県で水稻寒地早育稀植試験に成功し、高収量を実現したことは疑いようがなかった。二年目に、方正県は全県にこの技術を押し広め、三年目には、全黒竜江省にこの技術は押し広められ、全国にまでもこの技術は押し広められていった。方正県の科学技術研究員は、藤原先生の試験の基礎の上に、革新と発展を重ねて、技術は不断に高まりをみせ、現在、方正県の水稲収量は1600斤（800kg）を超えるまでになった。

藤原先生は、徳喜郷での二年にわたる試験に携わった後、毎年方正を一度、二度と訪ねては、伝授した水稻寒地早育稀植技術の拡大応用の状況を視察・指導された。

■誰からも好かれた人柄

藤原先生は穏やかな態度で、親しみやすく、仕事は真面目だった。もし田んぼのなかでネクタイを締めていなかったなら、現地の農民のおじさんそのものだった。私が富余村に彼を訪ねたり、彼が郷政府に来たりして試験の状況を話したとき、ときには深夜にまで及び、ときにはお酒を酌み交わしながら、簡単な料理を食べながら語り合った。そのときに、私は始めて知ったのだった。日本での水稲収量によって、「米作日本一（水稲王）」の称号を天皇から授与されていたことを。この話が出るたびに、彼は生き生きと顔を輝かせ、自慢そうで荣誉感に満ちていた。そんなときには、私たちは杯を持ち上げて、「米作日本一（水稲王）」の方正での試験成功のために乾杯をし合ったものだった。

その親しみやすい人柄で、一般庶民との関係も良く、当地の農民の誰からも好かれていた。春になり夏になり、家々の庭先になにか新鮮な野菜が採れると、先ずは彼に届けて食べさせ、秋になり、果物が熟してくればもいで採れたてを食べさせ、冬となり年も押しこめてくると、どこかの家が豚を提供して肉やお酒をご馳走し、大切なお客さんとしてもてなした。藤原先生はこれといった趣味もなく、毎日帰ってくると、最初にすることといえば、杯を持ち上げて方正白酒を一口飲むことだった。

藤原長作先生は1984年から1988年まで、毎年方正県を訪ね数日泊まれた。富余村の農民は冗談でこう言っていた——「藤原さん、日本に帰らないでよ！ 方正で連れ合いを探してあげるから、方正に定住しなさいよ！」——このとき藤原先生はとても楽しそうに笑っていた。

藤原長作先生は方正県荣誉公民証を贈られ、さらに中国国务院総理の接見と褒賞を受けられた。亡くなられた後には、遺灰は彼が深く愛した方正県に埋葬され、方正県中日友好園林には藤原長作先生のために墓碑が建てられた。

方正県の人々は、永遠に藤原長作先生を慕い偲びつづけることだろう！

2011年10月21日

（森 一彦訳）



<柳長青校長、写真は松木千明さん撮影>